

長かった残暑も峠を越えた。澄み渡る風にやうやく秋の本格的な到来を感じる今日この頃である。黄金色に輝く稔り豊かな稲穂の束がそこかしこで刈られていく。私の大好きな季節、そして神務、公務ともに最も多忙な季節の到来である。まもなく、出雲平野が一年で最も賑わしい秋祭りの季節を迎える。

出雲に限らず、日本の秋祭りといへば、鎮守の森から響きわたる笛や太鼓の躍動的な音色であらう。御存じの方々

錦田 剛志

も多いと思ふが、今日の出雲地方の祭儀では雅楽を用いない。胴長太鼓、締め太鼓を二本の細長いばちで巧みに叩きながら調子をとり、龍笛神楽笛が独得の旋律を奏でる。「出雲楽」と称される。「出雲楽」の奏者は神主もしくは

出雲神楽の継承に思ふ

それに準ずる立場の俗人が務めることを情とする。境内で奏でる楽は神聖なもので、あくまで神々に奉るものといふ意識が根強い。したがって、神祭りの以外の場で奏でることは忌避される傾向にある。



このことは、神楽も同じである。今日、出雲平野には神主神楽と里神楽といふ二系統の「出雲神楽」が継承されている。前者は、神主自ら舞奏でる一連の神事舞(「七座」など)と神能(神話劇を内容とする神事芸能)からなり、後者はそれらを神主以外の氏子が伝へ舞ふ。神主神楽は本神楽(ほんかぐら)、里神楽は地神楽(ちかぐら)とも呼ばれ、近年ますます明確な区分け、差別化の意識があった。いふまでもなく神楽は神迎へ、神送り、神懸かり、魂鎮、御祈念等の神事の根幹をなすべき呪的性格と、いはゆる饗応、

余興として祭りに参集する人々をも魅了する芸能としての性格を合はせ持つ。しかし、元々両者の性格は区分できるやうなものではない。その混沌の中に神事芸能の本質はあるのだらう。天岩戸前における八百万神の営みを思ひ起せば明白である。

だが、出雲平野の神主は、祭る者、舞奏でる者として、洗練かつ形式化された、神々を慰め斎き鎮める神事としての楽と舞を、頑なに意識的に守りしよと努めてきた。それは、余興としての無限の楽しさを知るが故に、あへて自己抑制した姿に映る。神主としての矜持が為せる業といつても良いだらう。

祖父(先代宮司)の存命中、「出雲の神主は奏楽と舞ができて一人前」といふことを、神楽に臨む厳肅な横顔と後姿が教へてくれた。もう十七、八年も前のことである。

にじきたるよし 島根 出雲神楽万九千社御目

残念ながら今日、出雲平野の代宮家(出雲では社家の呼称)に、楽と舞を継承する「一人前の神主」が何人あるだらうか。特に私たち若い世代に……。神社を取り巻く社会環境の変化はめまぐるしい。神主(天職)の生活基盤も兼業(本職)にのしかかっていることは筆者自身が身をもって証明してゐる。しかし、そこに甘えはないか。言ひ訳しつつ日々逃れてゐるだけではないのか。自問自答する時節にさしかかっている。

いつかは失はれ消えゆくことも歴史の流れであるが、それを伝へ護らうとする働きもまた歴史の営みである。私は後者に与したい。幣立つる此処も高天原なれば 集まり給へ四方の神々(『神能記』へ錦田家へ神楽歌より) この秋、大前に心をこめて舞奏でることしよう。